

しかし、相手に伝えようとした発話意図と相手に伝わった発話意図が必ずしも一致しているとは限らない。次の会話を見てみよう。

A：昨日、林と映画見に行ったんだって？
B：えっ、何が言いたいの？

上のAの発話は、二人の関係によって、いろいろな意味に解釈できる。二人が恋人同士であれば、非難あるいは詰問と解釈されるだろうし、二人が映画が好きな友人同士だとすれば、その映画の話をしたいという合図になるかもしれない。Bの発話も、Aの発話意図が分からずに、この返答をしたとも、その発話を非難あるいは反駁するためにしたものとも考えられる。また、「いや、そんな意味で言ったんじゃないよ」と相手の解釈を押し量り、それを否定することもできる。

このように実際の会話では、その発話意図の解釈はさまざまなものとなる。語用論ではこのような特定の状況で特定の相手に対して行われた発話の意味を探っていく。

8.2 発話行為（言語行為）理論



発話によって遂行される行為を**発話行為**（言語行為：speech act）理論という。**オースティン**は、『言語と行為』（1962）で、このような発話行為を以下のように3タイプに分類した。

発話行為 locutionary act	伝達を目的として、一定の意味を持つ文を発話する行為。 例：「暑いね」と言うこと
発話内行為 illocutionary act	発話によって、その意図が聞き手に伝わること。 例：「暑いね」と言うことによって <u>依頼すること</u>
発話媒介行為 perlocutionary act	発話によって、ある行為が行われること。 例：「暑いね」と言って依頼することによって、 <u>聞き手がエアコンの温度を下げる</u> こと

表1-2-20 発話行為(言語行為)の3タイプ

発話行為は文字どおり、伝達を目的とし、何らかの言語表現(=音声、語句、文)を用いる行為であり、話し手が聞き手に、「暑いね」という音声を発することである。この発話行為を行うことで、話し手は聞き手に対してエアコンの温度を下げしてほしいという依頼をするという別の行為を遂行している。これが**発話内行為**である。発話内行為により生じる機能は**発話内効力**と呼ばれ、命令、約束、依頼、質問、警告、

陳謝、提案、勧誘、祈願、感嘆などがある。発語内行為により、その結果として、聞き手やその他の人の感情や思考や行動に何らかの結果が生じる行為を**発語媒介行為**という。「暑いね」では、エアコンの温度を下げるのが一般的な結果だろうが、「そうですか？」と反対意見を述べる人もいようし、「集中暖房だから、仕方ないですね」と答える人もいよう。発話がどのような結果をもたらすかは状況と会話の参加者の関係によって異なる。

オースティンは、ある発話により相手に伝わる意図を発語内行為として分析した。この考えは、サール、グライスらに継承され、語用論の発展につながった。

また、オースティンは「約束する、命ずる、宣言する」など、発話した時点でその行為を行ったことになる動詞を**遂行動詞**と呼び、それらを含む文を**遂行文**^{※40}とした。

※40

例えば、「明日、必ずレポートを提出します」と発話すれば、その時点で約束したことになる。

☒ 間接発話行為

実際のコミュニケーションでは、発話の表面的な意味の裏にある言外の意味が大きな役割を果たしている。**サール**は、オースティンの研究を継承し、発語内行為のさらなる分析を行った。そして、聞き手に話し手の発話意図が伝わることを**間接発話行為**と呼んだ。これを以下の会話①と会話②で考えてみよう。

会話① 教室でノートを取っている学生Aが、隣の席の学生Bに言う。

A： あっ、間違えちゃった。あの一、消しゴム持ってますか？
B： はい、これ使って。2つあるから。

会話② ゲームに夢中でなかなか寝ない小学生(B)に対して父親(A)が言う。

A： もう11時だぞ。
B： は～い。お休みなさい。

会話①でBは、Aの「消しゴム持ってますか？」という発話が、授業中にノートを取っている状況で、隣で同様に授業を受けている自分に対して発せられたものであることから、「Aは書き損じた文字を消しゴムで消そうと思っているが、消しゴムを持っておらず、それを私に借りたいと思っている」と判断して、「はい、これ使って」と応じ